

一〇一六年一月一九日

川舟の揺らぐ岸辺や水温む

こすもす

子ら競ふ紙飛行機に風光る

智恵子

単線の線路まつすぐ初つばめ

なつき

下萌ゆる丘のベンチに推敲す

ひかり

一〇一六年一月一八日

梅の丘どの径とるも迷路めぐ  
口誦さむいつもの唱歌青き踏む

ひかり

四温なる駅の日だまり人屯  
糸ほどの蔓に芽を吹くさねかづら

なつき

一〇一六年一月一七日

せせらぎに見つけて嬉し落のたう  
湯宿の灯芽吹きの樹々へこぼれけり

菜々 満天 よし女

海光の方千畳に牡蠣筏  
奥の院へと標たつ梅の坂

さつき 菜々

一〇一六年一月一六日

風見鶲翻弄されし春嵐

春愁や閻王と眼のあひてより

雪間道踏みて富山の薬売り

よし女

草野球球は春泥まみれかな

足弱の吾も膝行す涅槃絵図

豆狸

一〇一六年一月一五日

行商の魚少なき余寒かな

菜々

草萌ゆるよちよち歩きできし子に

よし女

夫に買うふバレンタインのお饅頭

菜々

凝りし肩ぐるぐる回し春寒し

明日香

一〇一六年一月一四日

残雪の山に斜すホルンかな

宏虎

イナバウアー繰り返しゐる東風の藪  
外つ國の言葉もまじるこたつ舟

智恵子

田起こしの畝幾筋も明日香道

豆狸

一〇一六年一月一三日

岸壁を打つ波音も早春譜  
春炬燵孫に折り紙習ひけり

よし女

春めくや鰯の腹子ほのと透け  
風化して読めぬ一句碑凍てにけり

豆狸